青梅雨 その他

永井龍男

講談社

青梅雨その他

昭和四一年五月三〇日第一刷発行

著　者　永井龍男

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九　振替　東京三九三〇
電話　東京（九四二）一一一一（大代表）

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　株式会社大進堂

定　価　五二〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©永井龍男　昭和四一年　Printed in Japan

青梅雨その他　目次

いてふの町　9
しりとりあそび　33
ある友の会　61
蝶　83
ブルフロッグ大全　107
鯉と鮒　135
とこやのいす　165

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

冬の日　177
若い鶏　205
みずかき　235
ちっちゃな靴下　273
傘のありか　299
青梅雨　333

造本　伊藤　積

青梅雨その他

いてふの町

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

A

銀杏(いちょう)の木の巨きいのは、やはり公孫樹と書いた方が感じが出るようだ。

小石川から本郷台にかけて、その公孫樹の大木がまだかなり残っている。巨きいのは高さ三十米に達するといわれるだけに、秋の末になると、思わぬ町家の屋根越しとか、屋敷町の坂の上なぞに、黄色く冴えた葉の群れを見かけることがある。

黄色いといって、あれほど美しい黄色はない。樹の割りにしては細かすぎるほどの葉の一枚一枚が、競って一時に色づくのである。

「いつもより、妙に明るいが……」

と、思って、なにげなく見上げると、屋根の上に公孫樹の梢が日を浴びている。あんな処に、あんな大きな樹があったのかしらと、だまされたような気がすることがある。

神社や寺の境内にある古木が、たまたまある方角から、そんな風に聳えて見えるのであろうが、それは同時に、戦争から二十年経った現在も、公孫樹の古木と共に、古い東京がいくらかその下に残っている証拠でもある。

朝の公孫樹は明るい。

そろそろ霜の降りる朝もあって、町はもう寒いが、日を浴びた梢はかがやき、神社や寺の境内を近道する学生や勤人が、急ぎ足に大通りへ出て行く。

昼の公孫樹は明るすぎて、少し淋しさを誘う処がある。いちょうを、旧仮名遣いでは、い、て、ふ、と書くが、散り初めの葉は、ちょうどそのような姿で風に舞うことがある。

三時を過ぎると、急に公孫樹の木は、日の短さを感じさせてくる。病院の片側は大きく日蔭になるし、小学校の校庭や中学の屋上からわき上る喚声にしても、西へまわって行く日足の早さに合わせて、みんなで追いかけているようなあわただしさがある。

六階建ての病院について大通りを曲ると、向側のコンクリート塀の中は寺に附属した墓地である。その塀をさらに右へ曲ると寺の門前になり、それから左右に古い町並みが続く。

魚屋や八百屋や、カンカン金槌を使うブリキ屋もある。どの店も平屋か二階家で、菓子屋や

薬局の店は新式だが、それも通りに向いた側だけを模様変えしたもので、二階の看板の裏には、蒲団を干している家もあった。

店屋ばかりではなく、八百屋に続いて大きな門構えの家があったり、薬局の隣りに格子戸のついた仕舞屋が並び、真向いに西日をうけて、格子の影が上り口の障子にくっきり映っていたりした。

この通りの左右、家数にして三十軒足らずが、戦災を免れたまま今日に及んでいる。その中央辺りに、煙突が一本、昼前から煙りを吐き続けている。

毎日三時過ぎから、客を入れはじめる銭湯である。

四囲をかこんだ、病院や学校の高層建築を、岸壁に碇泊した大きな船だとすれば、つまりこの一郭の家とは、もう広い海には稼ぎに出られない旧式な小汽艇と、それに曳かれるはしけのようなものであった。

B

銭湯は、「松の湯」と染め出された水色の暖簾をかけるのを合図に、三時頃から客を入れる。松の湯の入口は、通りから一間ばかり引っ込んでいて、昔はここに大きな松の木があったそ

うだが、いまは広告入りのベンチが一脚置かれ、大溝にかけてあった板の橋も、コンクリートに変っている。路次をへだてて右隣りは植込みを板塀で囲んだ仕舞屋、左隣りは化粧品屋を兼ねた日覆の深い薬局で、日蔭になる向側には、畳屋とか鳶職の住いが並んでいた。

そんなお天気のいい日には、二時半頃になると必ずお婆さんが二人三人、チョコレートの名を書いた、ペンキ塗りのベンチに腰かけている。

どのお婆さんも、湯道具を容れたプラスチックの洗面器を持ち、孫を連れているのが多かった。

またその湯道具を、順々に膝にのせ変えて、

「さあ、おかけなさいませ」

と、ベンチの端へ席を作ることもある。

「どうも、すみませんな」

そう会釈して、ゆっくりそこへ体を置くのは、ステッキを持った老人で、リウマチスの気でもありそうな様子である。

そのうちに、薬局の日覆の外にも、仕舞屋の板塀にも、三人四人と老人達の数が増えてきて、日向ぼっこをしながら、どのグループもなにかそれぞれ語り合いをはじめる。

みんなお互いに、顔見知りばかりだから、あのお爺さんも来ている、このお婆さんも来てい

ると知って気持が落着いた上のことだが、その中にまじってA老人だけは、
「きょうも彼、来ていないぞ」
と、何度も辺りを見直した。
連れて来られた孫達が、松の湯の路次に集って、逃げたり追いかけたりはしゃぎまわっている方まで気を配ってみるが、やはりB老人の姿はない。
仕舞屋の板塀の裾の処にしゃがみ込んで、しきりに話込んでいる組へ、A老人は近づいて行った。
その組の中心になっているお婆さんは、つい坂下の方の町にある仕出し屋の御隠居だそうで、いつも二たこと目には、
「生れつき癇性なんでしょう、およそ一日だって、松の湯を休んだことはありませんよ。たとえ、槍が降ろうとね」
と、云い云いするので、この人なら、B老人のことを知っているかも知れないと、A老人は考えた。
「おや、こんにちは……」
仕出し屋の御隠居は、話の途中で愛想笑いをみせたが、御隠居はこのA老人には好い感じを持っていなかった。A老人の、多少相手を見下したような言葉遣いが、下町育ちの気に入らな

いのである。
「そうだね、あのおとっつぁんは、いずれ市役所か、なんとか省辺りの小役人上りと云った処だろうよ」
かげで、そんな評を口にしたこともある位だから、傍へ来たからと云って、こちらから相手にするつもりはなかった。
A老人は、そっちの話が一区切りした処で、脇から訊いてみた。
「あんた、相変らず毎日？」
「ここですか？　ええええ、一日休むと、その日一日気色が悪い質ですからね。お湯銭には代えられませんよ」
仕出し屋の御隠居は、誇らしげに応える。
「きのうか、おととい、もっと二三日前でもよいが、Bさんを見かけなかったかね？」
「Bさん？」
と、御隠居は眉を大げさにしかめる。
A老人の言葉尻りが、横柄に聞えて、なんだ交番の巡査みたいに、と思った。
「Bさんというのは、それ、夫婦とも小柄で、一しょに湯に入りに来る……」
「うんうん、通り寺町の、製本屋の離れに住んでいる……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com